

江戸客裏雑詩

頼杏坪

八百八街宵月明らかなり

秋風知知に虫声を売

貴人は解せず籠間の語

総て是れ西郊風露の情

【作者】頼杏坪（一七五六〜一八三四年）（寶曆六年〜天保五年）。江戸中期の儒者。漢詩人。三次町奉行を務める。名は惟柔。字は千祺、号して春草。杏坪は、後期の号。安芸の竹原の人。亨翁（こうおう）の四男（通称：萬四郎）として生まれた。頼山陽の伯父に当たる。

【語釈】* 江戸客裏雑詩：江戸に旅している間に、興の趨（おもむ）くままに作った、型にとられない詩。 * 八百八街：江戸中の町々の称。江戸の市中に町が多数あることを謂う。八百八町（はっぴやくやちよう） * 売虫声：（虫屋で）売っている（鈴虫や松虫といった、鳴く）虫の

声の意。 * 貴人：身分の高い人。 * 不解：理解しない。 * 籠間語：（虫）かこの中の（虫の）鳴き声を謂う。 * 総て：全部。いつも。例外なく。とにかく。 * 風露：風と露（つゆ）。 * 情：思い。感情。

【通釈】江戸中の町々に、宵（よい）の月が明るい時刻。秋風に、ほうぼうで虫屋で売っている鈴虫や松虫といった、鳴く虫の音がする。身分の高い人は、虫かこの中の虫の鳴き声が例外なく、西の方の郊外の風と露（つゆ）の思い（秋の実際の姿）であることを理解しない。